

## 精神保健福祉現場実習における精神障害者イメージと ストレス感情との関連性

大西 良 辻丸 秀策 大岡 由佳  
鋤田 みすず 福山 裕夫

### 抄 録

精神保健福祉現場実習において、学生の抱く精神障害者イメージとストレス感情との関連性を明らかにした。調査の結果、以下の4点が明らかとなった。①精神障害者イメージは、実習前で「親和」「不活動」「頑固」「内向的」「過敏」の5因子、実習後で「活力」「親和」「安定性」「消極的」の4因子が抽出された。②実習後に、精神障害者イメージは全般的に肯定的なイメージへと変化していた一方で、特定の否定的なイメージが根強く残されていることがわかった。③ストレス感情と精神障害者イメージの関連では「Harm (有害)」ストレス感情と精神障害者イメージの「親和」とに負の相関がみられた。④“社会福祉職への魅力”は、「親和」イメージと正の相関であることがわかった。

キーワード：精神保健福祉現場実習、精神障害者イメージ、実習ストレス感情

### はじめに

精神障害者への福祉的支援を志す学生に対して、どのような精神保健福祉に関する知識を伝えることが効果的であるのか、またその知識が学生のなかにどのように根を下ろし、どのような精神障害者観を作り上げていくのかということを検討することは精神保健福祉教育の重要なテーマであり、精神科医療の質の向上を図る上で基本的な事柄である。今回著者らは、精神保健福祉援助技術現場実習（以下、「現場実習」と略す）を経験する前後において学生が抱く精神障害者イメージの変化を明らかにして、そのイメージが実習中のストレスや社会福祉職への魅力などと、どのような関連があるかを明らかにすることを目的とした。

### 方 法

#### 1) 調査対象

本研究について主旨を説明し同意が得られた、精神保健福祉養成課程4年次大学生44名を対象とした。

#### 2) 調査時期

2004年6月～10月にかけて行った。

#### 3) 調査の内容と手続き

調査に用いた質問紙は次の2種類である。

##### (a) 精神障害者イメージの測定

学生の抱く精神障害者イメージを測定するものとして、Semantic Differential Method（以下SD法）を用いた。SD法は、Osgood, C.E<sup>1)</sup>が最初に理論構成を行ったもので、もともとは、言語の意味の測定法として開発されたものである。現在、人が色彩、音楽、絵画、商品、人物など広い範囲にわたる事象に対して抱く意味あるいはそのイメージを測定する方法として利用されるようになっている。本調査では大石<sup>2)</sup>や井上<sup>3)</sup>が心理学や教育学の分野で用い、パーソナリティの測定に有効であるとする形容詞対49項目の中から使用頻度の高い27項目の形容詞対を設定した。

評定方法は27項目の質問ごとに5段階の尺度（「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」の両極回答）のうちいずれかの回答を選択させた。評定尺度の配点は、「どちらともいえない」の0点を中心に置き-2～2点までの配点を行った。したがって、得点が正の数であれば左側の形容詞が当てはまり、得

点が負の数であれば右側の形容詞が当てはまることになる。

#### (b) 実習ストレス感情の測定

学生の実習に対するストレスの程度を測定する道具として開発されたのが、Pagana の Clinical Stress Questionnaire (以下「CSQ」と略す)である。Pagana<sup>4)</sup>は、Lazarus & Folkman のストレスの認知的評定理論に基づいて、状況を「Threat (脅威)・Challenge (挑戦)・Harm (有害)」と認知的に評価したときに起こるとされるストレス感情(脅威的感情・挑戦的感情・有害的感情)に着目し、これらの感情がストレス状態では同時に存在しているという立場から CSQ を作成している。

したがって、従来のようなストレスを肯定・否定のいずれか二者択一的な立場で捉えるものと異なり、多面的にストレス状況への心理的反応の把握が可能である。

その他に、年齢、性別、社会福祉の仕事内容への魅力について尋ねた。

手続きとしては、質問紙は個別に現場実習前後に配布し、その場で回収した。そして、調査結果については、実習終了後に文書にて通知、説明を行った。

#### 4) 統計解析

有効回答者の SD 法の評価得点の分布を求め、各項目の実習前後の変化について対応のある t 検定を行った。つぎに、学生が捉える精神障害者イメージの内容を因子分析(主因子法、バリマックス回転)によって明らかにした。精神障害者イメージと実習ストレス感情、社会福祉職への魅力との関連については、因子分析で抽出された精神障害者イメージの各因子を目的変数とする一要因の分散分析を実施した。

なお、これら一連の集計および統計処理には、統計パッケージ SPSS11.0J for Windows を使用した。

## 結 果

### 1. 調査対象者の特徴

本研究における対象者の性別は、女性35名(79.5%)、男性9名(20.5%)であった。年齢については、平均年齢が23.23±3.70歳で、20歳代が9割以上を占めていた。

また、「社会福祉職に魅力を感じますか」という問いに対して、6割強(65.9%)が「感じる」と答えていた。

### 2. 実習前後での精神障害者イメージ変化について

精神障害者イメージを尋ねる27項目についての実習前後での変化をみるために、t 検定を行った結果、「明るい-暗い」( $t=-3.26$   $df=43$   $p<0.01$ )、「積極的な-消極的な」( $t=-2.24$   $df=43$   $p<0.05$ )、「柔和な-頑固そうな」( $t=-2.51$   $df=43$   $p<0.05$ )、「穏やかな-激しい」( $t=-2.24$   $df=43$   $p<0.05$ )、「責任感のある-無責任な」( $t=2.11$   $df=43$   $p<0.05$ )、「思いやりのある-わがままな」( $t=2.11$   $df=43$   $p<0.05$ )、「親しみやすい-親しみにくい」( $t=-2.10$   $df=43$   $p<0.05$ )、の7項目で有意に差がみられた。このうち、「明るい-暗い」、「積極的な-消極的な」、「柔和な-頑固そうな」、「穏やかな-激しい」、「親しみやすい-親しみにくい」の5項目は、「明るい」「積極的な」「柔和な」「穏やかな」「親しみやすい」と肯定的内容へと変化した一方で、「責任感のある-無責任な」と「思いやりのある-わがままな」は「無責任な」、「わがままな」と否定的な内容のままであった(Table 1)。

### 3. 実習前後での精神障害者イメージの因子構造

#### 1) 実習前の精神障害者イメージ

実習前の精神障害者イメージについて、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化および解釈可能性から5因子解を適当と判断し、これを採用した。最終的には、0.5以上の因子負荷量を持つ5因子21項目を抽出した。また、採用された各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの内的整合性の信頼係数( $\alpha$ 係数)を求めたところ、 $\alpha=0.721\sim 0.933$ と高い信頼性が確認された。また、5因子解の累積寄与率は60.7%であった。

各因子の内訳は、第1因子6項目、第2因子5項目、第3因子5項目、第4因子3項目、第5因子2項目である。その内容は Table 2 に示すように、第1因子は、因子負荷量の極性に依じて高い順に、「かわいらしい」「親切的な」「思いやりのある」「感情的な」「陽気な」「温かい」の以上6項目からなり、これを「親和」因子と命名した。第2因子は、因子負荷量の極性に依じて高い順に、「無気力な」「疲れた」「不活発な」「臆病な」「消極的な」の以上5項目からなり、これを「不活動」因子と命名した。第3因子は、因子負荷量の極性に依じて高い順に、「頑固そうな」「激しい」「落ち着いたの無い」「真面目な」「清潔な」の以上5項目からなり、これを「頑固」因子と命名した。第4因

Table 1 実習前後での精神障害者イメージの変化

	精神障害者イメージ質問項目	実習前		実習後		t 値	自由度	有意確率
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
^A 1	明るい-暗い	-0.20	1.03	0.34	0.91	-3.26	43	**
^A 2	温かい-冷たい	0.75	0.92	0.93	0.79	-1.02	43	
^A 3	積極的な-消極的な	-0.48	1.00	-0.09	0.91	-2.24	43	*
^A 4	陽気な-陰気な	0.09	0.87	0.43	0.90	-1.93	42	
^A 5	活発な-不活発な	-0.07	1.02	0.16	0.99	-1.32	43	
^A 6	柔和な-頑固そうな	-0.27	1.04	0.23	0.94	-2.51	43	*
^A 7	真面目な-不真面目な	1.09	0.96	0.98	0.90	0.64	43	
^A 8	優しい-怖い	0.84	1.10	1.18	0.79	-1.83	43	
^A 9	勇敢な-臆病な	-0.59	0.87	-0.30	0.85	-1.91	43	
^A 10	理性的な-感情的な	-0.70	1.03	-0.40	0.93	-1.46	42	
^A 11	意欲的な-無気力な	-0.11	1.04	-0.09	1.01	-0.16	43	
^A 12	外向的な-内向的な	-0.57	1.04	-0.32	0.83	-1.28	43	
^A 13	清潔な-不潔な	0.16	0.89	0.02	0.85	0.85	43	
^A 14	元気な-疲れた	-0.43	1.17	-0.09	0.91	-1.95	43	
^A 15	敏感な-鈍感な	0.86	1.31	0.70	1.05	0.58	43	
^A 16	慎重な-軽率な	0.93	1.13	0.84	0.75	0.74	42	
^A 17	社交的な-非社交的な	-0.34	0.94	-0.16	0.83	-1.00	43	
^A 18	穏やか-激しい	-0.16	0.94	0.18	0.90	-2.24	43	*
^A 19	素直な-気難しい	0.61	1.17	0.36	0.92	1.07	43	
^A 20	責任感のある-無責任な	0.61	1.04	0.25	0.84	2.11	43	*
^A 21	思いやりのある-わがままな	0.52	0.98	0.16	0.89	2.11	43	*
^A 22	親しみやすい-親しみにくい	0.09	0.86	0.43	0.85	-2.10	43	*
^A 23	落ち着いた-落ち着きのない	-0.02	0.93	0.00	0.94	-0.13	43	
^A 24	おしゃべりな-無口な	0.18	0.76	0.11	0.81	0.48	43	
^A 25	かわいらしい-憎らしい	0.41	0.66	0.36	0.65	0.42	43	
^A 26	のんびりした-せかせかした	0.09	1.02	0.34	0.91	-1.43	42	
^A 27	親切な-不親切な	0.86	0.93	0.82	0.69	0.30	43	

(\*\* : p < 0.01 \* : p < 0.05)

Table 2 実習前の精神障害者イメージの因子構造

	第1因子 親和	第2因子 不活動	第3因子 頑固	第4因子 内向的	第5因子 過敏
かわいらしい-憎らしい	0.752	0.056	0.101	0.147	0.037
親切な-不親切な	0.724	0.205	0.398	0.046	0.043
思いやりのある-わがままな	0.682	0.013	0.212	-0.378	-0.071
理性的な-感情的な	-0.662	0.118	0.161	-0.130	0.245
陽気な-陰気な	0.555	0.365	0.134	0.299	0.055
温かい-冷たい	0.529	0.257	0.315	0.293	0.081
優しい-怖い	0.495	0.242	0.391	-0.126	0.005
親しみやすい-親しみにくい	0.428	0.395	0.315	0.164	-0.239
意欲的な-無気力な	0.075	-0.874	0.250	0.143	-0.056
元気な-疲れた	0.159	-0.813	-0.062	0.024	0.224
活発な-不活発な	0.037	-0.754	0.069	0.228	0.055
勇敢な-臆病な	0.055	-0.673	0.164	-0.107	-0.251
積極的な-消極的な	0.150	-0.638	0.156	0.199	-0.260
明るい-暗い	0.467	0.489	-0.006	-0.203	0.047
柔和な-頑固そうな	-0.090	0.151	-0.800	0.128	0.043
穏やか-激しい	0.121	0.144	-0.731	0.110	0.029
落ち着いた-落ち着きのない	0.352	-0.118	-0.640	0.173	-0.203
真面目な-不真面目な	0.357	0.132	0.559	-0.219	-0.373
清潔な-不潔な	0.372	0.242	0.529	0.112	0.010
慎重な-軽率な	0.469	0.106	0.485	-0.132	0.281
外向的な-内向的な	0.124	0.257	-0.103	-0.751	-0.218
社交的な-非社交的な	0.013	0.294	0.368	-0.669	-0.092
のんびりした-せかせかした	0.215	-0.164	0.263	0.664	0.260
おしゃべりな-無口な	-0.261	0.316	-0.414	0.442	-0.061
敏感な-鈍感な	0.003	-0.127	0.166	0.025	0.738
素直な-気難しい	0.177	0.279	-0.205	-0.387	0.603
責任感のある-無責任な	0.337	0.195	0.343	-0.047	-0.490
寄与率(%)	15.5	15.3	13.8	9.3	6.9
累積寄与率(%)	15.5	30.8	44.5	53.8	60.7

Table 3 実習後の精神障害者イメージの因子構造

	第1因子 活力因子	第2因子 親和因子	第3因子 安定性因子	第4因子 消極的因子
意欲的な-無気力な	0.818	-0.033	-0.241	-0.031
活発な-不活発な	0.796	0.212	-0.167	0.227
明るい-暗い	0.774	0.180	0.109	0.037
社交的な-非社交的な	-0.741	0.033	0.233	-0.125
外向的な-内向的な	0.707	-0.304	-0.088	0.194
陽気な-陰気な	0.696	0.174	0.141	0.214
清潔な-不潔な	0.642	0.097	-0.019	-0.282
責任感のある-無責任な	0.577	-0.344	0.458	-0.159
元気な-疲れた	0.536	0.202	-0.504	0.390
勇敢な-臆病な	0.491	0.057	-0.201	0.011
温かい-冷たい	-0.016	0.787	0.159	0.012
親しみやすい-親しみにくい	-0.019	0.758	-0.131	-0.185
穏やか-激しい	-0.056	0.627	-0.127	-0.557
真面目な-不真面目な	0.204	0.593	0.365	-0.013
かわいらしい-憎らしい	-0.088	0.576	0.201	0.230
親切な-不親切な	0.190	0.539	0.137	0.071
優しい-怖い	0.375	0.531	0.456	0.169
柔和な-頑固そうな	0.111	0.514	0.024	0.083
のんびりした-せかせかした	-0.106	0.400	0.097	-0.219
慎重な-軽率な	0.187	0.350	-0.057	0.183
思いやりのある-わがままな	0.022	0.041	0.665	-0.248
素直な-気難しい	-0.125	0.306	0.662	0.133
敏感な-鈍感な	-0.023	0.127	0.568	0.114
落ち着いた-落ち着きのない	-0.012	0.261	0.526	-0.371
理性的な-感情的な	0.288	0.336	-0.463	-0.359
おしゃべりな-無口な	-0.025	0.102	-0.053	-0.767
積極的な-消極的な	0.439	0.366	-0.022	-0.508
寄与率(%)	19.6	15.6	10.6	7.9
累積寄与率(%)	19.6	35.1	45.7	53.6

子は、因子負荷量の極性に応じて高い順に、「内向的」「非社交的」「のんびりした」の以上3項目からなり、これを「内向的」因子と命名した。第5因子は、因子負荷量の極性に応じて高い順に、「敏感な」「素直な」の以上2項目からなり、これを「過敏」因子と命名した。

## 2) 実習後の精神障害者イメージ

次に、実習後の精神障害者イメージについて、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化および解釈可能性から4因子解を適当と判断し、これを採用した。最終的には、0.5以上の因子負荷量を持つ4因子23項目を抽出した。また、採用された各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの内的整合性の信頼係数（ $\alpha$ 係数）を求めたところ、 $\alpha = 0.698 \sim 0.911$ と高い信頼性が確認された。また、4因子解の累積寄与率は53.6%であった。

各因子の内訳は、第1因子9項目、第2因子8項目、第3因子4項目、第4因子2項目である。その内容はTable 3に示ように、第1因子は、因子負荷量の極性

に応じて高い順に、「意欲的な」「活発な」「明るい」「非社交的な」「外向的な」「陽気な」「清潔な」「責任感のある」「元気な」の以上9項目からなり、これを「活力」因子と命名した。第2因子は、因子負荷量の極性に応じて高い順に、「温かい」「親しみやすい」「穏やか」「真面目な」「かわいらしい」「親切な」「優しい」「柔和な」の以上8項目からなり、「親和（実習後）」と命名した。第3因子は、因子負荷量の極性に応じて高い順に、「思いやりのある」「素直な」「敏感な」「落ち着いた」の以上4項目からなり、これを「安定性」因子と命名した。第4因子は、因子負荷量の極性に応じて高い順に、「無口な」「消極的な」の以上2項目からなり、これを「消極的」因子と命名した。

## 4. 現場実習におけるストレス感情と精神障害者イメージとの関連性

精神障害者イメージとストレス感情との関連を検討する前に、ストレス感情尺度の妥当性を確認した。その結果、クロンバックの内的整合性の信頼係数（ $\alpha$ 係数）は $\alpha = 0.844 \sim 0.889$ と高い信頼性が認められた。

ストレス感情と精神障害者イメージとの関連をみる

Table 4 実習ストレス感情と精神障害者イメージの関連性

	有害ストレス感情			挑戦ストレス感情			脅威ストレス感情		
	F 値	自由度	有意差	F 値	自由度	有意差	F 値	自由度	有意差
活力	1.36	8 35	n.s.	1.00	18 24	n.s.	0.91	17 26	n.s.
親和(後)	2.91	8 34	*	0.92	18 27	n.s.	1.30	17 25	n.s.
安定性	1.47	8 34	n.s.	0.32	18 24	n.s.	1.07	17 25	n.s.
消極的	2.02	8 35	n.s.	1.18	18 25	n.s.	1.62	17 26	n.s.

(\*: p<0.05)

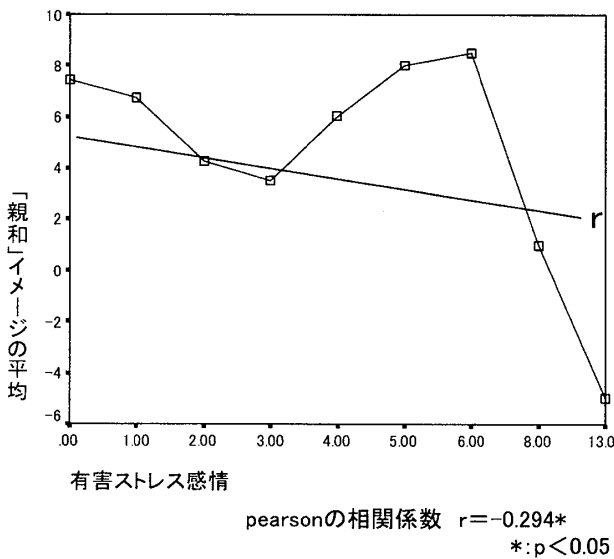


Figure 1 有害ストレス感情と「親和」イメージの相関

と、「Harm (有害)」ストレス感情と「親和」イメージの間に有意な関連がみられた (Table 4)。この因子間の相関係数は、 $r = -0.294$  ( $p < 0.05$ ) で負の相関であった (Figure 1)。

5. “社会福祉職への魅力”，性別と精神障害者イメージの関連について

“社会福祉職への魅力”と精神障害者イメージとの関連では、Figure 2に示すように、実習後の「親和」因子のみで有意な関連がみられ、「感じる」と答えた学生の「親和」イメージ得点が高かった。(F(1, 41) = 4.71  $p < 0.05$ )。

性別による精神障害者イメージの違いはみられなかった (親和: F(1, 42) = 2.13 n.s., 不活動: F(1, 42) = 0.38 n.s., 頑固: F(1, 42) = 1.46 n.s., 内向的: F(1, 42) = 1.21 n.s., 過敏: F(1, 42) = 1.10 n.s., 活力: F(1, 42) = 0.15 n.s., 親和(後): F(1, 42) = 2.66 n.s., 安定性: F(1, 42) = 0.05 n.s., 消極的: F(1, 42) = 1.04 n.s.)。

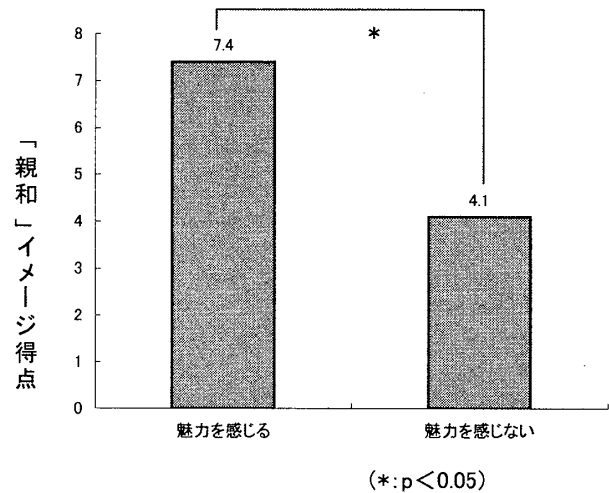


Figure 2 社会福祉職への魅力と「親和」イメージの関係

考 察

本研究の精神障害者イメージの前後変化をみると、7項目で有意に変化することが示された。このうち、「明るい-暗い」、「積極的な-消極的な」、「柔らかな-頑固そうな」、「穏やかな-激しい」、「親しみやすい-親しみにくい」の5項目は、「明るい」「積極的な」「柔らかな」「穏やかな」「親しみやすい」と肯定的内容へと変化した一方で、「責任感のある-無責任な」と「思いやりのある-わがままな」は「無責任な」、「わがままな」と否定的な内容のままであった。さらに実習後で全体的に肯定的なイメージへと変化しているものの、否定的なイメージが根強く残されていることが明らかとなった。このことは、山本<sup>5)</sup>が指摘するような「精神障害者に対する態度は時代や文化を超えて非好意的であり、偏見と言えるほどに強いもの」であり、また、Brown, R<sup>6)</sup>が「日本の文化は、精神障害者に対する偏見の強い文化である」と報告するように、日

本の歴史や民族の価値観が精神障害者を「異質なもの」と捉え、精神障害者への嫌悪、精神障害者の排除に関与していると考えられる。

さらに、現場実習という形で精神障害者についての情報や実際の接触経験によって、否定的な感情の減少した学生がただちに許容的な態度を取らないという背景には、疾患の重篤さや関与することの困難さを予測するためであると考えられる。このことは、岡田ら<sup>7)</sup>の精神障害者に対する知識が増加し肯定的な態度が学年を追うことにより多く認められるのと同時に、「家族に精神障害者がいたらそれを他人に知られるのは恥である」という傾向が増加する結果と相応するものであるといえよう。

また、今回は対象者の回答に要した時間を測定していなかったため断定できないが、実習終了後のほうが実習前に比べて、回答に要した時間が全体的に短縮傾向であったことは、太田<sup>8)</sup>が指摘する「刺激語を提示されてからの反応時間については、刺激語に対する知識量の差や馴染みの差が影響する」ことから、学生の精神障害者についての知識や馴染みが実習によって深まったと推測できる。

次に、性別による精神障害者イメージの違いについてみると、精神障害者イメージと性別との間に関連は認められなかった。しかし、著者ら<sup>9)</sup>が「精神医学」受講前後での学生の精神障害者イメージの変化を明らかにした研究では、精神障害者への接近や接触に関するイメージで性差がみられることを示している。本研究で性差がみられなかったことは、石毛ら<sup>10)</sup>が対象者は、実習指導者などの性別の影響を受ける可能性が大きいと指摘しているように、今回女性が8割を占め、実習指導者の半数が女性であったことが何らかの影響を与えた要因であったかもしれない。

さて、実習ストレス感情と精神障害者イメージの関連では、「Harm (有害)」ストレス感情と「親和」イメージでのみ関連がみられた。

堤<sup>11)</sup>によれば、人間に共通する感情として「恐怖、怒り、喜び、悲しみ、受容・信頼、嫌悪、期待、驚き」の8種類の基本情動を分類し、CSQにおける脅威的感情は「恐怖」、挑戦的感情は「期待」、有害的感情は「嫌悪」の基本情動に基づく感情だとみなせると述べていることから、学生が、実習中に会った精神障害者に対して嫌悪感を抱く体験をした可能性が推測できる。しかし、本研究では、嫌悪感を抱く内容まで明らかにできなかったため、断定することができない。今後の課題点となった。

最後に、イメージ評価を実習教育に取り入れていくことの重要性について述べる。藤原<sup>12)</sup>はイメージについて「イメージは心の現象すなわち内面的な心の表れとみなすことができる。そのイメージは、個人における主観的で個別的な心の現象ないし心理的事実と考えられる。」と述べ、イメージの固有性を示している。さらに、藤原<sup>13)</sup>はイメージの特徴を、「内面的なところの世界として、不可知なところをイメージとして体験できる可能性があり、イメージを通じてところがところにアプローチを図っていく可能性を得るということである」と述べており、内面の体験を具体化することのできるツールであるといえる。

本研究では、SD法を用いて福祉学生に対する現場実習での精神障害者イメージを評価した。医療系の学校に在籍している学生に対して精神障害者観のイメージ測定を行っている先行研究としては、医学部の学生を対象にしたもの<sup>14)15)</sup>看護学生を対象にしたもの<sup>16)17)</sup>などがある。しかし、精神保健福祉の分野でイメージを活用した研究は著者の知る限りない。今後は、SD法の質問項目の妥当性を検証して、著者ら独自の調査項目の開発を行っていき、さらに、実習以外にも進路を決定する時期、卒業後など調査時期を変えて調査し、それらを比較検討していくことが重要となるであろう。

## まとめ

本研究では、以下の4点を明らかにすることができた。以下の4点が明らかとなった。①精神障害者イメージは、実習前で「親和」「不活動」「頑固」「内向的」「過敏」の5因子、実習後で「活力」「親和」「安定性」「消極的」の4因子が抽出された。②実習後に、精神障害者イメージは全般的に肯定的なイメージへと変化していた一方で、特定の否定的なイメージが根強く残されていることがわかった。③ストレス感情と精神障害者イメージの関連では「Harm (有害)」ストレス感情と精神障害者イメージの「親和」とに負の相関がみられた。④“社会福祉職への魅力”は、「親和」イメージと正の相関であることがわかった。

今後、精神保健福祉実習教育の態度教育に関して、的確に評定していく評価尺度の開発が課題となった。

## 謝 辞

本稿を作成するにあたり、西九州大学の橋本みきえ先生に、終始多大なる御教示と御指導をいただき、心より感謝いたします。

文 献

- 1) Osgood, C.E The nature and measurement of meaning. Psychol. 49 p197-p237
- 2) 大石勝代 大学生, 中学生および精神分裂病者における意味構造の比較 心理学研究 第45巻 第1号 p21-p31 1974
- 3) 井上正明 小林利宣 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究 第33巻 第3号 p69-p76 1985
- 4) Pagana KD. Psychometric Evaluation of the Clinical Stress Questionnaire. Journal of Nursing Education 28 169-174 1989
- 5) 山本和儀 精神科への偏見とその解消 ストレス科学 19(4) p220-p229 2005
- 6) Brown, R Prejudice Its Social Psychology. 橋口捷久 黒川正流編訳 “偏見の社会心理学” 北大路書房 1999
- 7) 岡田加奈子 高木一枝 看護学生の精神障害者に対する知識とイメージ 看護実践の科学 1 p91-p95 1993
- 8) 太田勝正 放射線や被曝という言葉から看護学生は何を連想するのか～連想するイメージの特徴と効果的な放射線看護教育についての検討～ Quality Nursing 6(7) p45-p50 2000
- 9) 大西 良 辻丸秀策 鋤田みすず 大岡由佳ら 「精神医学」受講における学生の精神障害者イメージの変化 久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編 5号 p37-p46 2005
- 10) 石毛奈緒子 林 直樹 看護学生の「精神障害者」に対するイメージ～精神保健の講義による変化～ 日本社会精神医学会雑誌 9 p11-p21 2000
- 11) 堤由美子 看護学生の臨床実習に対するストレス質問表の開発と適用 鹿児島大学医学雑誌 第48巻 第2号 p123-p137 1996
- 12) 藤原勝紀 イメージ療法 現代のエスプリ 387 1998
- 13) 藤原勝則 イメージを使いこなす 臨床心理学 第3巻 第2号 p173-p179 2003
- 14) 山本和義 精神障害者に対する医学生の態度の形成～医学教育の場における国際比較～ 日本社会精神医学会雑誌 5 p129-p135 1996
- 15) 寺田純雄 岩沢邦明 清水靖仁 医学生と精神障害との社会的距離に関する研究 公衆衛生 57 p735-p738 1993
- 16) 渡邊美千代 学生と指導者との間の相互作用に関する研究～実存的－現象学的作用の視点から～ 日本看護学教育学会誌 Vol.10 No.3 p1-p9 2000
- 17) 萩野美智子 急性期病棟で働く者のジレンマ～個人としての自分と看護婦としての自分とのほごまで～ 日本精神保健看護学会誌 8(1) p51-p56 1999

精神保健福祉現場実習における精神障害者イメージとストレス感情との関連性